

Treatment of Small Bowel Diseases

—Proceedings of the First Symposium on Hepato-Gastroenterology
of the University Hospital Center of Nice, Nice 1972—

東京大学医学部第1外科

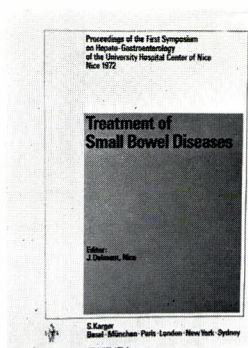
武 藤 徹 一 郎

本書は1972年、Niceで開催されたHepato-Gastroenterologyに関するシンポジウムから、慢性小腸疾患に関するものを収録し、主として診断と治療についての論文が集められている。14人の執筆者中9人がフランスから集まり、この方面でのフランス学派の考え方を知るには好都合である。

まず、小腸に対する薬剤作用についての総説、次いで thyrotoxicosis, thyroid の medullar cancer, carcinoid などのホルモン原性下痢に関する事柄が要約されている。

celiac sprue (著者は子供の celiac disease と成人の idiopathic sprue を同一疾患と考えてこのように呼んでいる), Whipple's disease, tropical sprue などのわが国ではなじみの少ない疾患について、それぞれの専門家が診断、治療を中心に述べている。jejunal biopsy などの診断法の面で参考になる記述が載っている。

infectious jejunoileitis の項では achlorhydria との関係についても述べられており興味深い。



Crohn 病については最も多くのスペースが割かれている。Crohn 病に対する内科的、外科的療法についての評価はフランスでも他の欧米諸国と大差はないようである。BCG を用いた immunostimulative treatment についての記載があり、かなりの効果が認められているとのこと興味深い。小腸の enzyme deficiency による疾患についても簡潔に要約されている。

後半の4編の論文は外科的治療に関するものである。すなわち、小腸の慢性阻血症の治療、小腸切除後の合併症およびその治療、小腸切除後

の下痢の外科的治療についての記述があり、最後に小腸移植を行なって76日生存した症例報告で終わっている。

全体を通読してみても、下痢が種々の原因によって発症することがよく理解できる。正確な診断のもとにはじめて正しい治療の行なわれることが強調されている。

シンポジウムでの発表をまとめたものだけに、各論文は簡潔にして総説的であり、詳細なものではないが各論文の終わりにシンポジウムでの質疑応答も収録されており、肩の凝らない読物となっている。小腸疾患のみを扱った成書は少なく、この方面での一般的な知識を得るには本書は手ごろな小冊子であろう。全文127ページ、新しい文献も豊富に載っており、英語の記述もきわめて平易でわかりやすい。

(医学書院洋書部扱い, S. Karger, Basel-München-Paris-London-New York-Sydney, 28 figs. 1 in color 1973. ¥4,620)